

甘すぎた夜

近藤啓太郎

サンケイ新聞社

近藤啓太郎

甘すぎた夜

甘^{あま}すぎた夜^{よる}

近藤啓太郎著

昭和43年11月25日発行

＜検印廃止＞ ©

定価 三八〇円。

発行者 村上政之

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一の七 (103)

大阪・北区梅田町二七 (530)

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

目 次

スカウト	7
家庭の事情	12
ホステス誕生	24
ホステス修業	38
さまざまな客	49
ライバル	65
処女と札束	79
哀しい肉体	98
かけひき	110
赤い舌	126

逆効果

139

塩を撒く

153

浮気の条件

168

遠出

178

荒稼ぎ

195

変貌

210

弱肉強食

222

盛衰

235

転落

245

甘^{あま}
す
ぎ
た
夜^{よる}

スカウト

砂千と民子は誘い合つて、美容院へ行った。待合室のソファに腰を下すと、すぐあとから登貴子が現われた。登貴子は銀座の「風姫」というバーのマダムで、三十になつたばかりの愛嬌のいい美人だった。

「おはようございます」

と登貴子の方から笑顔で挨拶をした。

「よくお眼にかかるわね。いつも、おふたり一緒だけど、

ご近所同士？」

「同じアパートの隣同士ですよ」

と民子が応えた。

「おやおや、それじゃあ、大へんなご近所っていうわけね。そして、おふたりとも一人でアパートに住んでいらっしゃるの？」

「いいえ、わたしは兄貴と一緒にだし、民子さんは弟さんと一緒」

と今度は砂千が応えた。

「どこか地方から、出てらつたの？」

「ええ。わたしの家、房州なんです。田舎はつまらないから、東京の会社に勤めている兄貴をたよって、上京して来たっていうわけなの」

「そう。あなたは？」

と登貴子は民子を見返した。

「わたしの家は、この近所の旅館なの。それが、よくはやるもんで、わたしたちの部屋まで客室に改造しちゃったわけ。で、わたしと弟が近くのアパートへ疎開しなければならなくなつたの」

「そうなの。でも、おふたりともけっこうなご身分ね。毎日、美容院へ行ったり、映画を見たり……。うらやましいわ」

「そうかしら？」

と民子が首をかしげて見せて、笑いながら言った。

「刺戟がなくて、つまらないわ。ねえ、砂千ちゃん」

砂千はうなずき返して見せた。

「おやおや、ひまをもてあましてるなんて、いよいようらやましい限りね」

と登貴子は大げさな表情でうらやましがって見せてから、今度はいとも気軽な調子でこう誘った。

「でも、そんなにひまなら、退屈しのぎにわたしの店へア

アルバイトに出来ない。どう、とにかく、今日でも明日でも、様子を見にお店へ遊びにいらっしやいよ」

「ママさんのお店、銀座でも一流なんですってね」

と砂千がいった。

「まあね」

と登貴子は自信たっぷり笑いながら言った。

「自分で言うのも何だけど、確かにわたしの店、銀座でも一流よ。立派なお客さまばかりだわ。大会社の幹部クラスの方たち。それに、有名な俳優や小説家の先生や野球の選手や、そういう個人のお客さまも、うちは多いわ」

「そんな立派なお店へ行って、わたしたちなんか、つとまるかしら？」

「大丈夫よ。そんな心配、全然いらないわ」

「ほんと？」

「ほんとよ。百聞一見にしかず。だから一度、遊びにいらっしやいな。そうすれば、ほんとか嘘か、すぐ分るわよ」と言って、登貴子は銀座の店の場所をふたりに教えた。

翌日、民子は薄化粧で、クリーム色の平凡なスーツを着て、夜の銀座へ出た。砂千は念入りの濃い化粧で、イアリングやネックレスもつけ、黒いレースの服を着て出かけた。

が、行き交う人の誰もが民子には眼をやるが、砂千には眼をくれなかった。

民子は大きな美しい眼の、中高の美貌を持っていたが、砂千は卵形の輪郭だけが取柄とりがらの、平凡な顔だった。

風姫は銀座でも一流のバーだけあって、確かに入り口の造作だけ見ても垢抜けていた。その入り口をはいって、階段を下りて行くと、ボーイがていねいにお辞儀して迎えた。来意を告げると、ボーイは店内に案内して、マダムを呼んだ。

「あら、いらっしやい。よく来て下さったわね」

登貴子はニコニコしながら、二人をテーブルに案内した。二人が椅子に腰を下して、隣のテーブルを見ると、有名な野球選手が三、四人で、賑かに飲んでいた。テレビで見ているときの感じと違って、いずれも想像以上の大男であった。

「野球の選手って、もの凄く大きいのね」

「ほんと。驚いたわ」

と二人が物珍しそうに眼を見張っていると、登貴子が笑いながら言った。

「大きいでしよ。その反対に、実物が小さいのは役者よ。ほら、見てごらんさい。奥のテーブルにいる若い人」

なるほど、登貴子に言われて奥のテーブルに眼を向けると、有名な映画の二枚目がホステスに囲まれて酒を飲んでいた。

「ほんと。思ったより小さいのね。でも、素敵」

と砂千がいささか興奮に上気しながら言った。

ボーイがカクテルを運んで来て、テーブルに置いた。

「さ、乾杯しましょう」

登貴子が弾んだ声で言い、二人はグラスを手にとった。

口あたりのいい、軽いカクテルであった。

「どう、ほかのお客さまも、みなさん垢抜けた立派な方ばかりでしょう？ ホステスもみんな綺麗で、愉しそうにお客さまと話し合っていて、いい感じじゃない？」

「ほんとに、素敵だわ」

「一流のバーって、わたしたちが知っているバーなんかとは、全然違うのね」

と民子と砂千は改めて店内を見まわした。

「でしよう」

と登貴子は自信たっぷりながら言った。

「どう、親のすねばかりかじってないで、つとめてみる気ない？」

「それが、わたしは駄目なんです」

と民子がカクテルのグラスをテーブルに置いて、登貴子にきっぱりと言った。

「あら、どうして？」

「両親の頭が古くなくて、絶対に許してくれないの。で、今日はお断りに来たんです。それに、砂千ちゃんが一人じゃ心細いから一緒に来てくれって言うもんで……。すみません」

「ほんと……」

とがっかりしながらも、登貴子はあきらめ切れずに民子の顔を見守った。

「わたしつとめさしていただくわ」

と砂千は野球選手や映画俳優に眼をやりながら、上気して弾んだ声で登貴子に言った。

「あんただけじゃあ、しょうがないわねえ」

と登貴子は急に人が変わったようなそっけなさで砂千を見返してから、再び民子を見つめた。

「ねえ、どうしても駄目？ 今日、お家へ帰ったら、うちの店の感じをよく話して、ご両親にもう一度、相談してみてくださいない？」

「ええ。でも、きつと駄目だと思うわ。てんで頑固で、ど

うしようもないんですもの」

「しょうがないわねえ」

登貴子は最初から砂千は問題にしていなかったのだ。民子ひとりでは勤めづらいと思って、抱き合せのつもりで、砂千も誘ったに過ぎなかった。

登貴子はすっかり機嫌が悪くなって、投げやりに砂千に向って言った。

「でも、仕方がないわ。あんた若いのが取柄だし、それに新人を入れなきゃあなんない時期に来てるんだし……。あんた、何ていったっけ？」

砂千ははなはだしい屈辱を感じながらも、登貴子に氣押された形で応えた。

「中村砂千です」

「どういう字を書くの？」

「石へんに少の砂と、百千万の千です」

「そう。まあ、名前だけはちょっと洒落^{しやれ}てるわね。だけど、このままじゃあ、とても店に出せないわよ。とにかく、ここじゃあ落着いて話が出来ないから、向うへ行きましよう」

登貴子はそう言うと、さっさと立って階段の方へ行行った。「砂千ちゃん、どうする？」

と民子が小声できいた。

「こうなったら、もう意地だわ」

と砂千は怒りに凝った眼で言いながら、民子を見ずに立ち上った。

「そう。じゃあ、わたしはこれで先に帰るわ」

砂千は黙ってうなずき返ししながら、登貴子のあとを追った。

「マネージャー」

と登貴子は呼びながら、階段下の脇の扉を開けた。

「ママさん、何か」

と言いながら、黒い背広に蝶ネクタイを結んだ、三十過ぎのマネージャーが、登貴子に近寄って行った。

「春日井さんも一緒に部屋へはいって。さ、あんたもはいりなさい」

と登貴子は砂千にも言いながら、開けた扉の中へはいった。

六畳くらいの部屋の中には、簡単な椅子と机、それにホステスたちの身回り品が置いてあった。

「マネージャー、この子、砂千ちゃん。うちへはいることになったんだけど、このままじゃあ、ちょっとねえ」

と登貴子は椅子に坐って、煙草に火をつけながら、砂千

を横眼で見やった。

マネージャーの春日井は登貴子にうなずき返しながら、微笑で砂千を眺めた。

「砂千ちゃん、幾つ？」

とマネージャーの春日井は訊いた。

「十九です」

「ずいぶん若いんだね、十九とは。若くっていいや。でも、先ず、その味噌っ歯を直してもらわなくちゃあね」

「そうなのよ」

と登貴子は相槌を打ってから、つづいて春日井にこう命じた。

「明日、さっそく例の歯医者へ連れてってよ。前歯を大至急直してってね」

「ママさん。ついでに出来ることなら、眼鼻の整形もしちゃったら、どうですかね」

「そうね。そうでもしなきゃあ、とても売れっ子にはなれないものね」

と登貴子は春日井にうなずき返してから、砂千にきいた。

「どう、あんた。整形する気ある？」

砂千は屈辱感に震えながら、勝気に登貴子を見返した。

「わたし、ホステスになる以上、ホステスに徹しますわ。ママさんがやれっておっしゃるんなら、整形でも何でもやります」

「そう。あんた、思っより根性があるのね。気に入ったわ」

と登貴子はようやく笑顔を見せながら、砂千をながめた。

「整形の手術代や何かでお金が足りなくなつたときは、わたしに相談しなさい。じゃ、マネージャー、あとはたのんだわよ」

「はい」

「じゃあ、わたし、お店へ出るからね」

と登貴子は部屋を出て行った。

「砂千ちゃんて言ったね」

と言いながら、春日井は砂千と差向いに椅子にすわった。

「はい、砂千です。どうぞ、よろしくお願いします」

「こちらこそ。ところで、さっそく明日、歯医者へ行ってくれるね」

「はい、行きます」

「じゃ、歯医者に連絡しておくから、必ず行ってよ。それから、砂千ちゃんの電話は何番？ ついでに住所も……」

と言って、春日井はメモシはじめた。

「砂千ちゃんは誰かと一緒に住んでるの？」

「兄と一緒にです」

「兄さんの職業は？」

「漁業会社へ勤めてます」

「そう。兄さん、砂千ちゃんがホステスになること、反対じゃないの」

「反対しても、わたし、いったん言い出すと、あとへひかない性質なの」

「なるほどね。じゃ、とにかく明日、歯医者へ行つて」

「はい」

砂千は春日井から歯科医院の場所を教えてもらうと、風姫を出て銀座を歩いた。

砂千はひとりになると、さすがに涙で眼がぬれた。口惜しかった。この屈辱は一生忘れないと思った。屈辱感を通りこして、激しい悲憤の情を感じた。いや、いつかは登貴子を見返してやるんだ、と砂千は悲憤の中に闘志を感じ出した。

家庭の事情

砂千がアパートへ帰つて来ると、兄の房二は寝ころんで、テレビを見ていた。

「ただ今」

「お帰り。おそくまで、どこへ行っていたんだい？」

「銀座よ」

と砂千は部屋の隅の鏡台の前に横坐りして、イアリングをはずしながら言った。

「今度、わたし銀座のバーへ勤めることにしたの」

「銀座のバー？」

と房二は驚いて起き上った。

「そうよ」

と砂千は鏡の中の房二の顔を見やりながら、ふてぶてしくからかうように言った。

「いけない？」

「きまつてるだによ」

と房二は腹を立てたせいか、生れ故郷の房州弁になった。「どうしてよ？」

「どうしてって、バーの女になんかなりゃあ、ろくなことにならねえにきまつてるじゃねえかよう」

「本人さえ、しっかりしてりゃあ、大丈夫よ」

「みんな、誰でも最初はそう思ってるだよ。だっけんがな、世の中はそう甘くねえだ。おめえみてえな女、遊び馴れた男から見りゃあ、ほんの子供つてもんだっぺさ。簡単にだまされちまうだよ」

「わたしは絶対にだまされないわ」

「阿呆女子！」

と房二は叱りつけた。

「第一、おめえは見ず知らずの男に酒を飲まされて、抱きつかれたり、変ないたずらをされたりして、平気なんか」
「あんちゃんは安物のバーしか知らねえから、そんなこと言ってるんだっぺよ」

と砂千も思わず房州弁でやり返した。

「銀座にはそんな柄の悪い客なんか一人もいねえ。みんな会社の重役とか、プロ野球の選手とか、有名な俳優なんかだよ。銀座の風姫って、どんなバーだか、誰かに聞いてみろっせえ。銀座でも一流ださ」

「へえ、そんな一流のバーへ、おめえみてえなおかちめんこが、よう勤まるだね」

房二に痛烈な皮肉を言われて、砂千は黙りこんだ。房二はかきにかかって、嘲笑しつづけた。

「おめえみてえなおかちめんこを雇うバーは、たぶん一流でも、びりから一流なんだっぺよ。違うんかい？」

砂千は鏡の中の房二をにらみつけながら、口惜しさに涙を流した。が、砂千の涙を見ると、房二はますます腹立たしげに言った。

「おめえが泣くと、いっそうみっともねえ顔になるから、やめろっせえ。涙なんてものは、美人に似合うもんだあさ」

砂千は鏡台に突っ伏しながら、全身を震わせた。

「都合が悪くなると、すぐに泣きやがる。たちの悪い女子だえ。いつまでも泣いてやがるんなら、どっかへ行っちゃまえよ。あたうるせえでおいねえ。どこかへ行きやがれよ！」
「行くわよ！」

と砂千は立ち上った。

砂千はアパートを出ると、あてもなく街をさまよい歩いた。

一日も早く美貌になりたい。そのためには、どんな苦勞もいとわない。

砂千はそれ以外のことは考えなかった。

ところで、整形のためには、幾らくらい費用がかかるのか。

砂千には見当がつかなかった。マネージャーの春日井に聞いておけばよかった。いや、今から風姫に電話をかけて聞けばいい。

砂千はそう思うと、さっそく公衆電話を探して、風姫に電話をかけた。

「風姫でございます」

と男の声がした。

「マネージャーの春日井さんをお願いしたいんですけど……」

「はい、ちょっとお待ち下さい」

と応えてから間もなく春日井が出た。

「おまたせしました。春日井でございますが……」

「わたし、砂千です。さっき、おうかがいした……」

「ああ、砂千ちゃんか、何？」

「あの、整形って、いったい幾らくらいかかるのかと思って……」

「鼻と眼を整形するわけね？」

「ええ」

「四、五万くらいものじゃないの」

「そう。そんな程度なの。もっと高いのかと思ったわ」

「却って歯医者の方が高いかもしれないよ。処置をする歯の数にもよるけど、五万から十万くらいかかるんじゃない？」

「そう。わたし、今そんなお金、持っていないけど、どうすればいいかしら？」

「歯医者のお金は店でもつよ。もちろん、あとで砂千ちゃん給料から引いてゆくんだけどね」

「そう。でも、砂千ちゃん、あてがあるの？ あてがなければ、わたしからママに話して、前借りしてあげるよ」

「どうもありがとう。でも、何とかなるつもりです。もし、都合がつかないときは、よろしく願いますわ」

「まかしとき。これから、わたしに何でも遠慮なく相談しなさいよ。それから明日、歯医者にはついて行ってあげるから、わたしから電話があるまで、アパートで待っていて」

「いろいろとすみません」

「砂千ちゃんは根性があるから、ついこっちも応援したくなっちゃったのさ。砂千ちゃんはきっと、銀座で有名なホステスになるよ。頑張って」